

Jugend

Philharmoniker

17

ユーゲント・フィルハーモニカー

第 17 回定期演奏会

2023 年 3 月 18 日 14:00 文京シビックホール 大ホール



ごあいさつ

本日は、ユーгент・フィルハーモニカー 第 17 回定期演奏会にご来場くださ
いまして、誠にありがとうございます。

今シーズンは当団にとってコロナ禍からの光が見える 1 年となりました。長
野・福島と 10 年以上に渡って続いていた地方公演こそ再開は叶わなかったもの
の、第 3 回目を数えた特別演奏会では、関東近郊の高校生との共演や当団コンサ
ートマスター 清水貴則とのコンチェルトなどを盛り込み、充実した演奏会とす
ることができました。また、当団の理念である「アマチュアオーケストラが社会
にどのように貢献できるかを模索する」に基づく活動として実施してきた室内楽
単位での訪問演奏では、新潟での演奏を含む 3 公演の機会に恵まれ、感染症拡大
前のような交流の広がりを実感する機会にも恵まれました。今後もこれらの活動
を更に充実させ、音楽とともにこの苦しい時代を乗り越えていければと考えてお
ります。

さて今回の定期演奏会では、2度目の共演となる橘直貴先生の指揮により、リスト、R.シュトラウスの名曲、そして定期演奏会では実に11年ぶりとなるベートーヴェンの交響曲から最高傑作の一つ「英雄」を演奏いたします。特にベートーヴェンでは、当団にとって初めての“HIP (Historically Informed Performance)”に取り組み、ティンパニやトランペットには古楽器を用いて演奏します。これまでの我々の常識を覆すようなアプローチには大変苦戦しましたが、名曲に新しい視点で向き合う日々は非常に充実したものとなりました。どうかユーゲントの新たな挑戦を見届けていただければ幸いです。

最後になりましたが、橘先生をはじめ、本演奏会の開催にあたってご協力いただきました皆様、そしてご来場いただきました皆様に、心からの御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対して引き続きのご期待と変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしく願いいたします。

ユーゲント・フィルハーモニカー 代表 湯田 怜央奈

プログラム

F.リスト：交響詩《前奏曲》S.97

R.シュトラウス：《ばらの騎士》組曲 Op.59

— 休憩 20分 —

L.V.ベートーヴェン：

交響曲第3番 変ホ長調《英雄》Op.55

(終演 16:00 頃)

指揮：橘 直貴

演奏中にスマートフォン等でパンフレットをご覧いただけますが、音が出ないように設定の上、画面を暗くするなど周りの方への配慮をお願いいたします。

指揮 橘 直貴

札幌市出身。

1988年桐朋学園大学音楽学部にホルン専攻として入学。1992年同大学卒業後、研究科に進み、1994年より1997年まで同大学の附属機関である指揮教室に在籍する。

この間、指揮を岡部守弘、紙谷一衛、黒岩英臣の各氏に、ホルンを安原正幸氏、チェンバロを鍋島元子氏（故人）に師事する。また、大学在学中



より、シエナ・ウィンドオーケストラに入団、1995年4月まで同団のホルン奏者を務める。大学卒業後から現在に渡り、ウィーン国立音大助教授である湯浅勇治氏の指揮セミナーに参加、師事する。

1999、2001年 ウィーン・マスタークルゼ指揮マスターコースにてサルヴァドール・マス・コンデ氏に、2000、2003、2004、2006年 イタリアのムジカ・リヴァ夏期国際アカデミー指揮マスターコースにてイザーク・カラブチェフスキー氏に、また2001年ドイツのシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン音楽祭指揮マスターコースにてヨルマ・パヌラ氏に師事する。

2001年第47回ブザンソン国際指揮者コンクール・ファイナリスト、ならびに会場内の聴衆による投票にて最優秀である聴衆賞受賞。同年に、オーケストラ・レジオナル・ドゥ・カンヌと、2006年のサンクト・ペテルブルグ・フィルハーモニーと共演。2007年、第2回バルトーク国際オペラ指揮者コンクールにて優勝。

これまでに、東京交響楽団、東京シティフィル、東京室内管弦楽団、札幌交響楽団、仙台フィル、広島交響楽団、関西フィル他に客演、各地のオーケストラ、合唱団やオペラの指揮者として活動。

現在、東京室内管弦楽団のプリンシパルコンダクター、コンセール・エクラタン福岡の音楽監督を務めている。

ユージェント・フィルハーモニー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユンゲオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≡プロオケには出来ないこと）」を追求している。



©Ryosuke

今期の活動

2022年

7月18日 デイ・ホーム弦巻（世田谷区）：夏のコンサート（弦楽四重奏）

9月18日 第3回特別演奏会（鎌倉芸術館 大ホール）

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』第1幕への前奏曲

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲（独奏＝清水貴則）

ブラームス：交響曲第2番

指揮＝安齋拓志

11月19日 トロノキハウス（新潟県十日町市）：クロスコンサート

（ホルン五重奏、弦楽四重奏）

12月 7日 デイ・ホーム弦巻（世田谷区）：クリスマスコンサート

（木管五重奏）

12月10日 室内楽演奏会〔団内〕（カルッツ川崎 アクトスタジオ）

曲紹介

F.リスト：交響詩《前奏曲》 S.97

交響詩はリストが創始したとされる、文学・詩・絵画など具体的内容を音楽として結実させた、19世紀に生まれた最も重要な標題音楽のジャンルである。その萌芽は過去を遡るとベートーヴェンの交響曲第6番《田園》、ベルリオーズの《幻想交響曲》、ワーグナーのライトモチーフで見られる。ワーグナーを支持したリストが交響詩というジャンルの確立に至ったのは歴史の必然だろう。リヒャルト・シュトラウスはこのジャンルで個性を開花させ、瞬く間に19世紀の旗手として駆け上った。

《前奏曲》は、この曲が書かれる4年前に詩人オートランの詩による男声合唱曲《四元素》の序奏として書かれた後、曲中から3つの主題が取られ交響詩として現在の形に再構築された。序文に、本作の大意を示す詩の一節が寄せられており、詩人ラマルティーヌの『詩的瞑想録』から取られている。つまり、一旦別の曲として作曲したものの、後にラマルティーヌの詩に着想を得て改作されたと見ることができる。序文の内容は「人の一生は死への前奏曲である」というもの。単一楽章だが構成は4部に分かれ、各部が序文になぞらえて曲が展開する。

人生は、死によって唱えられる未知の讃歌への一連の前奏曲である。時に愛によって輝き、また時には激しい嵐に夢を破壊され傷つく。傷ついた人々は田園で

の生活によって傷を癒し、トランペットが警報を鳴らすと再び戦地へ赴き戦いの中で自らの意識と力を取り戻す。

第1部 誕生は死

第2部 嵐

第3部 田園生活での癒し

第4部 再び戦地へ

交響詩という曲のコンセプトや転調にロマン的な部分は見られるが、和声感は古典的であり「苦悩から勝利へ」という伝統的なベートーヴェンの語法の中で捉えることができる。

主調はハ長調でありながら冒頭の第 1 主題は旋法的な手法で調性をぼかしており、分散和音の中に徐々に減 7 の和音を加えていくことで人生が死に向っている不穏さを表す。曲の最後はアーメン終止で締めくくられ、勝利と共に人生という戦いへの祈りも感じられる。

R.シュトラウス：《ばらの騎士》組曲 Op.59

《ばらの騎士》は『夢』のオペラだ。オペラの長い歴史が培ってきた、あらゆる魅力のエッセンスを凝縮した作品である。組曲版はオペラから抜粋し演奏会用に編曲したもの。

舞台は 18 世紀のウィーン。元帥夫人マリー・テレーズと恋仲にある青年オクタヴィアンが、不埒で好色漢なオックス男爵の花嫁への「ばらの騎士」を務めることになる。オクタヴィアンが花嫁ゾフィーに銀の薔薇を届けると、二人は恋に落ちる。二人はオックスとの婚約破棄を計略し、最後には無事結ばれる。「ばらの騎士」とは婚約の印である銀色の薔薇を花嫁に届ける使者の騎士で当時のウィーンの風習であった—という脚本ホーフマンスタールの創作である。

前作の楽劇《サロメ》・《エレクトラ》から一転し 18 世紀喜劇、特にモーツァルトを意識した作品だが、シュトラウスは《ばらの騎士》と次作《ナクソス島のアリアドネ》以降「ワーグナーからモーツァルトへ」と言われる古典への回帰を始めた。《ばらの騎士》は、確かにモーツァルトのオペラ《フィガロの結婚》を 20 世紀版にリメイクしている作品ではある。しかし、音楽はモーツァルトに比べ遥かに重厚で、ワーグナーの楽劇様式・シュトラウスの交響詩の手法はまだ色濃い。交響詩《ドン・ファン》以降、シュトラウスが一貫して使い続けた曲の開始直後に一瞬で心を掴む手法は、冒頭のオクタヴィアンと元帥夫人のライトモチーフでも健在だ。様式は、ワーグナーの楽劇様式・モーツァルトのロココ様式が混在する。この敵対する両者を結びつけることは、ポスト・ワーグナーの作曲家は皆できなかった。しかしシュトラウスはヨハン・シュトラウスのウィンナ・ワルツ（劇中のオックスのワルツ）を使うことで両者を結びつけ、幻想の調和を作り出している。

17世紀から19世紀までのオペラは20世紀では終わってしまった。《ばらの騎士》は、シュトラウスがオペラの終わりを暗示した作品だ。《ばらの騎士》第3幕で、元帥夫人は結ばれた二人を横目にそっと去る。それは彼女の若さへの別れであり、シュトラウスからモーツァルト、ワーグナー、ヨハン・シュトラウスというオペラ史における「思い出の名場面」への別れでもある。ここは、シュトラウス作品お決まりの『諦念の最期』だ。組曲版の終わり方はどうだろう。「オックスのワルツ」で終わりに向けて加速しながら、華々しく終わる。少し滑稽さと切なさを感じてしまうほどに。ここにもやはり、『諦念』が見える。



L.V.ベートーヴェン：交響曲第3番 変ホ長調 《英雄》 Op.55

ベートーヴェンは《英雄》で後に続く「長大な交響曲」という道を切り拓いた。

ベートーヴェンにとって交響曲を作曲するという行為は、ハイドンやモーツァルトと比べて全く意味が異なる。ハイドンとモーツァルトにとって、交響曲はオペラ・劇音楽・教会音楽に続くジャンルであり、その場限りの機会音楽的な側面がまだある。彼らは序曲シンフォニアタイプの三楽章シンフォニーから始め、やがて第3楽章にメヌエットを置いた「急－緩－メヌエット－急」の4楽章構成の交響曲様式を確立させた。ベートーヴェンはそんな二人を横目にかなり慎重に交

響曲創作に取り組んでいる。二人からの影響は絶大で、交響曲第1番・2番ではまだその影響が色濃い。《英雄》はそんな先人の影響から脱し、ベートーヴェン自身の個性が爆発的に開花した曲と言っていい。

英雄的で力強く長大な第1楽章、突如登場する衝撃的な葬送行進曲の第2楽章、その衝撃をあざ笑うが如くメヌエットではなくスケルツォを置いた第3楽章、そして変奏曲の第4楽章。楽章の構成だけでも、かなり革新的で実験的な要素を孕んでおり当時は驚愕だっただろう。実際、初演は賛否両論だった。

ベートーヴェンは20代後半から耳の不調が始まり、《英雄》作曲以前のバレエ《プロメテウスの創造物》を作曲した31歳頃には既に難聴がかなり進行していた。そして身体的・精神的苦悩から『ハイリゲンシュタットの遺書』を書き、絶望の淵に立つ。その苦悩を克服した後に書いた交響曲が《英雄》である。当初ベートーヴェンは自由と平等のために戦うナポレオン・ボナパルトを讃えこの曲を書いたが、そのナポレオンが皇帝に即位したと知るや怒り、表題を《ボナパルト》から《シンフォニア・エロイカ》（英雄的な交響曲）へと変更した。ナポレオンの逸話や、第1楽章で登場した英雄が第2楽章の葬送行進曲で死を迎える物語性は標題音楽の芽生えを感じさせる。少なくともアプローチはかなりロマン的だ。《英雄》が第1番・2番に比べてここまで革新性が高められた理由は何だろうか。『ハイリゲンシュタットの遺書』の絶望とそこからの克服にある気がしてならない。

安德新之介